

平成24年度臨床研究テーマ成果報告書

診療科（部）名：口腔外科1（制御系）
研究期間：2012年4月～2013年1月
研究課題名：口腔扁平上皮癌の臨床治療生成機の検討
<p>研究課題の概要及び成果：口腔癌は発症頻度が増加しつつある悪性腫瘍の一つである。今回、治療計画立案、より良い治療予後を得るためにその治療方法、治療成績について過去35年間に当科で加療した扁平上皮癌の治療成績に関して検討を行った。対象は1977年から2011年までに大阪大学歯学部附属病院第一口腔外科で治療を行った口腔扁平上皮癌の患者827例とした。これらの症例に対して、治療を行った年代（A;1977年～1983年、B;1984年～1990年、C;1991年～1997年、D;1998年～2004年、E;2005年～2011年）・原発巣の部位・治療法・進行度を指標に分類し、5年生存率の検討を行った。</p> <p>年代別の5年生存率ではA;61%→B;66%→C;75%→D;79%→E86%と扁平上皮癌全体では、近年になるほど5年全生存率が延長し、治療成績の向上が認められた。また部位別では、舌癌ではA;48例(67%)→B;59例(64%)→C;67例(76%)→D;78例(88%)→E;107例(92%)、と5年生存率の向上が認められた（カッコ内は5年生存率）。上顎歯肉癌、頬粘膜癌においても同様の傾向を認めた。しかしながら、下顎歯肉癌では、A;24症例(61%)→B;30症例(76%)→C;32症例(79%)→D;31症例(71%)→E;37症例(78%)と緩やかな5年生存率の延長は見られるものの、大きな変化は認められなかった。</p> <p>まず、画像診断技術の進歩があげられる。近年の例ではPETが登場し、さらに診断精度を高いものとしている。治療前の診断精度が向上し、的確な治療方法を選択できたために、成績が向上したものと考えられる。しかしながら、下顎歯肉癌などは治療成績の向上が緩やかであり、更なる診断法、治療法の検討が必要と考えられた。</p>
上記概要・成果に関連する図表等